

寂聴先生と祖母

瀬 尾 ま な ほ

時間が過ぎるのが年々早く感じるようになり、ふと気がつくと、今年も早、寂聴先生の三回目の命日を迎える。

もう1年が経つたのか、となんだかがっくり肩を落とします。

先生の死後に生まれた次男は二歳になり、しゃべれるようになつて、もうすぐ三歳を迎えるころにはオムツも完全にとれるだろう。次男の成長には感動と喜びを感じるのと同時に、一人の人間がここまで育つたのだから、その分の月日が確実に経つていることを痛感する。

時間が経てば経つほど、先生と離れて過ごす時間が増えていく。10年間、ほぼ毎日のように傍にいたのに、今ではもう遠い人になつてしまつた。それでも毎日想わない日は

ない。

携帯の中の写真アルバムには先生との写真がたくさん残つてゐる。写真の容量が多く、携帯の空きが無くなつても、私は先生の写真を消すことが出来ない。先生が構えず自然体の姿で、何気ない日々の様子を撮影したものが多いで、それでももつともつと撮つておけばよかつたと後悔する。

会えなくなつて3年が経ち、写真を見返すとそこには楽しかつた思い出しかない。亡くなつた直後は、先生の写真を見ることが出来なかつた。悲しくて、辛くて、見ると涙が溢れていたからだ。それが今は見返すことが出来るようになつて、先生との日々を懐かしんでいる。私のイキイキした笑顔を見ると、この時が一番人生の輝いた瞬間だった

と思う。

「日にち葉」とはどんな悲しみや苦しみも月日が経つことで、悲しみを乗り越えることが出来ると関西ではよく言われている言葉だ。それは先生も法話で『忘却は神様が与えてくれた贈り物』だと話していた。先生との思い出はどれも絶対忘れてくないものばかりだけど、私がこの先、生きていく間にきっとその記憶も少しづつこぼれていってしもうのだろうか。

先生が亡くなつた後、翌年に17年一緒にいた愛犬によるが亡くなり、今年には祖母が亡くなつた。3年続き、大切な存在を失い、大往生した3人だから自分の中でなんとか納得できるものの、やはり堪える。先生が晩年、自分の親しい人が先に逝つてしまふ度に「なんで私は死なないんだろう」とぼやいていた。長生きすればするほど人の死を経験することになるのは、宿命かもしれない。

私の亡くなつた祖母はいくつもの病気を抱えており、最初のほうはいつもしんどそうだった。手先が器用で料理や手芸が得意であった祖母は、毎年干支のぬいぐるみの置物を作っていた。寂庵にも飾るように毎年贈つてくれ、先生も「本当に器用で上手よね。どれもかわいいし」と褒めて

くれていた。私が日本海に住む祖父母の家に休みに帰ると、「まなほは優しい。おじいちゃんやおばあちゃんのところに帰る若者なんているの? まなほは休みになればよく会いに行つて。本当そこだけは感心する」と毎回褒めてくれた。私が先生のもとで働くようになり、祖父母も大喜びで、自慢の孫となつた。先生が私たち家族を幸せにしてくれた。

向上心があり、努力家のところは先生と祖母もよく似ていて、「一人とも一瞬たりとも時間を無駄にしたくなかった。祖母は身体がうまく動かなくなつて、精神的にもつらかったと思う。手がリウマチで曲がつてしまつて箸も上手に持てなくなつてしまつていた。

冬は寒いので帰省することを控えており、暖かくなつたら会いに行くと電話で言つていたのに、結局亡くなる五月まで帰ることが出来なかつた。

祖母は急変し、その翌日病院で息を引き取つた。突然のことでの誰もが予想していなかつた。ここ数カ月は体調が悪かつたので手芸も辞めてベッドで横になつていたと思いつんでいた。祖母の死後、二階にある祖母の手芸部屋に行くと、クリスマスの手芸の大作が机一面に広げられていた。

それはまだ最中のものであった。どうやつてあの状態で二階へ登ったのか、違うようにして上つたに違いない。祖母がつい最近までここに座つて裁縫をしていたことがわかれり、涙が出た。

寂聴先生も最期まで諦めていなかつた。よりよいものを書きたいという精神を持ち続け、ペンを離さなかつた。病気をし、入院生活が続くと「こんな生産性のない日々が嫌だ」と嘆いた。それはきっと祖母も同じだつたに違いない。瞬たりとも無駄にしないこと、何かをし続けること、自分を見限らないこと。それを最期までつらぬき通した。

亡くなつた人たちとは、時が経つても私に大切なことを教えてくれる。私がそのとき気づかなつたことが、今となつて感じることがある。私はこれからも寂聴先生から教えを受け、学び続けるのだろう。